

ルターの恩恵論と「十字架の神学」

マルティン・ルターの神学的挑戦

須藤英幸 著

プロテスタント神学の源流を辿る

宗教改革の神学的端緒は、信仰義認論（神の恩恵による救済論）の再発見に見いだされる。このルターの“神学的突破”を歴史的背景から把握し、一連の聖書講義から思想の内実を読み取り、隠れたる神を説くルター独自の「十字架の神学」へと至る神学的展開を解明する考察。アウグスティヌスの恩恵論やドイツ神秘主義の影響も探る意欲的な研究。

《著者紹介》須藤英幸（すどう・ひでゆき）… 福島県生まれ。2003年米国フラー神学大学院神学研究科修士課程修了。2008年京都大学大学院文学研究科思想文化学専攻（キリスト教学）修士課程修了。2014年同博士課程修了。京都大学博士（文学）。現在、東京基督教大学神学部准教授、共立基督教研究所長。著書に『「記号」と「言語」——アウグスティヌスの聖書解釈学』（京都大学学術出版会、2016年）、『21世紀のソシユール』（共著、水声社、2018年）ほか。



A5判・上製・300頁・定価 4,620円（本体 4,200円+税）・ISBN 978-4-7642-7483-9 C3016